

大砂

「春日部夏まつり」

毎年7月13日に近い土・日曜開催



夏まつりは 御輿磨きから始まる

「春日部夏まつり」は、市のビッグイベントの二つだ。春日部駅周辺は交通規制が敷かれ、道の両脇に屋台がずらりと立ち並ぶ。道路は舞台と化し、和太鼓競演や、よさこいソーラン、流し踊りなどの催しが繰り広げられる。

庄巻は大人御輿のパレードだ。市内の各町内会に保存されている25基もの御輿が一堂に会し、かすかべ大通り周辺を練り歩く。この一大イベントを二目見ようと、2日間で25万人もの人が市の



大人御輿の始まる前、子ども御輿が町内を練り歩く。

内外から押し寄せる。
春日部夏まつり実行委員長の関根慶剛さん^{けいこう}も、「御輿の数といい、まちの盛り上がりようは他の地域に類のない



山崎哲男さん 大砂在住
「まつりは青春そのもの。まつりを辞めたら、一気に年を取ってしまう」というほどのまつり好き。

素晴らしいイベントです」と胸を張る。

7月に入ると、各町内でまつりの仕度が始まり、まちはにわかに活気づく。

旭町では子ども会に所属する数組の親子が集まって、分解された御輿の部品をていねいに磨いていた。小学生の子さんと参加した石山真理子さんは、「まつりは大切な文化。参加することで子どもの人生をより豊かにしてあげられると思う。何よりも、子どもがまつりを楽しむことで、自分の住んでいるまちを好きになつてほしい」と語る。

旭町の田形全弘^{たがたまひろ}自治会長は、

「御輿を磨くことが、まつりへの関心につながり、10年後、20年後、この子たちが伝統を受け継いでくればよい」と目を細めた。



若い女性の担ぎ手も増えている。

まつりの日、町内は 一つの大きな家族になる

大砂町内では、自治会のメンバーが東八幡神社に集まって、御輿の手入れや、神酒所（神酒などをお供える場所）作りに精を出していた。長年地元に住んでいる人だけでなく、他の町から越してきた人も参加している。

自治会では、できるだけ多くの人にまつりを楽しんでもらいたいと、転入者には特に積極的にアプローチしている。黙々と作業をする釜井好人さんは4年前に市外から転入。自治会の呼びかけに「お御輿を担ぎたい」と手を挙げた。釜井さんは

「勤め人の自分にとって、まつりは準備期間を含め、地域の方々と親睦を深める絶好のチャンス。共に過ごす時間の中で、まつりのことだけじゃなく、人生について教えてもらうことも多い」と

言う。

大砂で生まれ育ち、約40年御輿を担ぎ続けてきたという山崎哲男さんは、「まつりは地域をつなぐかけがえのないイベント」と力説する。

「まつりには、御輿を組み立てる人、食事を用意する人、神酒所の留守番をする人、と多くの仕事があって、世代に応じた役割がちゃんとある。子どもも大人も町内が一つになって作り上げていくものなんです。その過程でみんなの距離が近づいていきます。」

例えば、おにぎり一つにしても、婦人会のベテラン主婦が若い世代のお母さんたちに味つけを教えることから、世代間の交流が生まれ、関係ができてあがる。そういう意味では、まつりの日は、1年に一度、町内が一つの大きな家族になる日なのかもしれません」



地域はまつりで一つにつながる。町内は大きな家族だ。



担ぎ手の声と観客の拍手が溶け合い、 まつりのエネルギーは最高潮に達する。

まつり初日の午後6時、御輿のパレードが始まった。スタートは春日部駅の北東に位置する一宮交差点付近。一基一基、かすかべ大通りの大群衆の中を次々と西へ向かう。先頭を行くのは大砂だ。およそ1000人が重さ500キロの御輿を担ぎ、練り歩く。続くのは一宮町の御輿。鎌倉末期から伝わるという、重さは1000キロもある。大池親水公園をイメージして緑色の房をつけた大池の御輿など、個性的な御輿も次々と連なる。

セイヤー、セイヤー。ソーレ、ソーレ。威勢のいい担ぎ手の声が響き渡ると、

呼応するように見物人たちが拍手とかけ声を送る。23基（2日目は25基）の御輿すべてが出揃うのは、夜のとりが降りる頃。提灯が灯り、闇の中を揺れ動く様はこの上なく幻想的だ。

通りには御輿と人であふれかえり、むせかえるような熱を帯びる。やがてパレードが春日部駅前に着く頃、かけ声、鈴の音、手拍子のすべてが大音量で混じり合い、まつりはクライマックスを迎える。

だが、御輿担ぎが終わらない町内会もある。例えば、大砂だ。御輿好きがいちばん担ぎたがるのは、御輿

の前後に通っている担ぎ棒の先端部、「端棒^{はなぼう}」である。どの位置より目立つポジション。ただ、端棒は御輿の傾きに大きく影響するので、本番では波が打たないようしっかりと担げるだけの体力のある人に任せられる。

「そうすると、担げない人がいてかわいそうでしょ。大砂では、パレードのあと東八幡神社に戻って、『じゃあ、女の子だけで担いで』『今度は中学生入って』『最後は役員』って、いろんな人に端棒を担いでもらう。そうするとみんな喜ぶし、また盛り上がるんですよ」（山崎さん）



御輿パレードのルーツは 八坂神社の祭礼

今こそパレードという形をとっているが、もとは一宮交差点近くにある八坂神社の祭礼だった。

かすかべ大通り界限は、江戸時代、宿場町として栄え、市も開かれていた。その市神（＝市場を守る神様）として祀られていたのが八坂神社だった。

当時の祭礼を記した資料には、宿内を御輿が渡御する記述が残り、大正期



夏まつりの1週間前に行われる“御霊入れ”。

の八坂神社の祭礼絵はがきには、各町の御輿や山車飾りが映っている。

祭礼は戦後の一時期に中断したものの、やがて復活。昭和48（1973）年、市制20周年を記念して、夏まつりの御輿パレードとして、あらたなスタートを切った。今も夏まつりの1週間前になると、八坂神社に粕壁地区の24の地区長が集まり、“御霊入れ”の儀式が行われる。

八坂神社で儀式を執り行う押田豊宮司は、「それぞれの地域で御霊の入った御輿が担がれ、粕壁地区全体が元気になることを願って儀式に臨む」と言う。

50年の眠りから覚め、 山車はよみがえった

2日目の見どころの一つは、御輿の前に登場する山車のパレードである。

昨年は御輿の前に3基の山車と屋台が出た。仲町町内会の「底抜け屋台」では、三味線・太鼓・笛・鉦の演奏と子どもたちの踊りが披露され、山車の上では江戸囃子が演奏された。次の八丁目新町地区の山車ではお囃子やおかめひよつこ踊りなどが披露され、まつりの雰囲気盛り上げた。

3番目に登場したのは内出町の山車だ。大正時代に造られたもので、高さは4.5メートル。ケヤキやヒノキをふんだんに使い、前後左右に美しい彫刻が施されている。この立派な山車は、実は昨年、内出町が旭町から譲り受けたものだ。きっかけは、自治会長の集まりの際に、内出町の新井陸雄会長が旭町の会長から受けた相談だった。新井会長が当時のいきさつを話してくれた。



「『組み立てのできる人がいなくなつて、もう50年も山車を動かしていない。保管場所の確保にも困っている。どうにかならないか』ということでした。うちの町会には組み立てのできる者がいるけれど、すでに山車は持っている。悩みましたが、春日部市の歴史を刻んできた大切なものだから、捨てるわけにはいかない。ひとまず引き取って、いつか使わせてもらおうと考えていました」

ところが、地元の内出町に持ち帰って、町内の人たちに見せると「大きくて立派。今年のまつりでぜひ出そう」と、



平成11(1999)年、仲町町内会に復活した底抜け屋台。

すぐに話がまとまった。5月初旬から有志が毎週のように集まって、一つひとつの部品を洗い、サビを落とし、彫刻を磨きあげた。山車は50年の眠りから目覚め、見事によみがえった。

そして迎えた当日。名前こそ内出町の山車だったが、内出町と旭町が一緒になって引いた。山車によって二つの町がつながれた瞬間だった。



まつりでつながる 地域の強い絆

どのまちにも、長年まつりを支えてきた人がいる。その伝統を引き継ぐのは、ずっと地元で暮らしてきた人であり、新しく春日部に来た人でもある。まつりには不思議な力がある。人と人をつ強く結ぶ力だ。まつりによってさらに地域の絆は深まっていくに違いない。

また、歴史を感じながら参加することで、違った視点からもまつりを楽しめるはずだ。今年の春日部夏まつりが今から待ち遠しくならない。

